

ひそかに 読まれている本

『その名にちなんで』
ジュンパ・ラヒリ 小川高義訳
新潮社 定価 2310 円(本体 2200 円+税 5%)
Tel.03-3266-5111



自分の名前が、ずっと嫌いだった

平尾隆弘 (編集者)

主人公ゴーゴリ・ガングリーは、ハイスクール卒業時、ある感慨に襲われる。

——人間は生きているうちに何度名前を書くだろう。百万回？ 2百万回？

彼はインド(ベンガル)人の両親から生まれたインド系アメリカ人だ。ゴーゴリという名は父親がつけた。父は若いころ、列車事故で九死に一生を得たが、そのとき手にしていた本がゴーゴリの『外套』だった。いわば命の恩人の名前を息子につけたわけである。

ゴーゴリはいつしか「インド風でもアメリカ風でもない」自分の名前が嫌になってくる。幼少時には何の違和感もなかったのに、思春期になるとサインするのさえ気が重い。とうとう大学入学を機に「ニキル」と改名する。

ゴーゴリとニキル。主人公は2つの名前のあいだを揺れ動く。ゴーゴリのままではいられないし、ニキルにもなりきれない。それは両親・家族・親族との距離であり、同時に移民2世が遭遇する、父母の国(インド)と自分が生れ育った国(アメリカ)との距離でもある。

こう書くと観念的な小説のようだが、そんなことはない。次々に繰りだされるエピソード、ちょっとした心の動きや細部の描写が鮮かで、飽きることない面白さである。

小説の時間は1968年から2000年までの32年間。叙述はほぼ現在形、つまり同時進行形で進んでいく。考えてみれば、誰にとっても「現在」の積み重ねこそが人生なのだ。「現在」の中に、実は過去も未来も含まれているのだけれど。物語を追う私たちは、登場人物たちの「現在」

に立ち合いながら、彼らの過去をふり返り、未来を予感している。

現在形が光彩を放つのは、食欲と性欲を満たす場面である。

たとえば彼はモウシュミというインド系女性のアパートを訪ね、手料理をごちそうになる。外食なら共にしていたが、あらためて鶏のワイン煮を作る彼女を見て、どぎまぎしてくる。

「さて、いつ食べましょうか？」と、彼女が言う。「お腹すいてる？」

「いつでも。何ができるの？」

こんな会話が続くやりとりは、小説中もっともエロスに満ちた場面である。

現在形が続くなかで、過去形がきわだつ美しいシーンがある。父が亡くなったあと、幼い日のケープコッドでの思い出が甦る。寡黙な学者だった父は、ゴーゴリを防波堤の果ての灯台まで連れて行った。

「きょうという日を覚えていてくれるか、ゴーゴリ？」と父が振り向いて言った。(略)

「いつまで覚えてればいいの？」

うねるような風の音の中で、父の笑い声が聞こえた。(略)

「ずっと覚えてるんだぞ」ゴーゴリがたどりと着くと父は言い、急ぐこともなく防波堤を後戻りして、母とソニア(妹)が待つところへ連れていった。「覚えておけよ。おれたち二人で遠くへ行ったんだ。もう行きようがなくなるまで行ったんだからな」

過去がたんなる過去でなく、永遠の現在になることもある。

